

中部地区英語教育学会紀要における 「実践報告」論文の傾向と課題について

田中 武夫(山梨大学)

0. 研究動機

- (1) 英語教育の実証研究における探索・検証型、量的・質的研究の方法論 (e.g. 三浦, 2004; 竹内・水本, 2012)
- (2) 授業実践を対象とした授業研究の方法論としてのアクション・リサーチなどの方法 (e.g. 佐野, 2000; 佐野, 2005)
- (3) 日頃の授業で教師がどう問いを立てどうデータを集めどう分析しどう解釈すれば、公的な授業研究となるか?
- (4) 中部地区英語教育学会紀要における実践報告(とくにアクションリサーチ)の傾向と課題を分析

1. 実践報告とは?

1.1 学会での実践報告の定義 (中部地区英語教育学会紀要投稿規 2012 年現在より)

「理論研究」	既存の研究成果を援用し、理論の発展の通史的概観、複数の理論の比較、あるいは、ある論点に関する先行研究の検討を行うもの
「実証研究」	理論的考察から導かれる仮説・研究課題を実験・調査・実践により検証するもの
「実践報告」	教育現場において執筆者自身が行った比較的長期的な指導実践に基づき、実践内容を公開し共有すること、あるいは教材資料の集積を目的として執筆されたもの
「調査報告」	史的資料、教育実態の現状分析、意識調査の結果など、英語教育にとって資料的価値が認められるもの

1.2 Practitioner Research (Ellis, 2012)

... 研究主題は理論から生まれてくるものではなく、教室の革新的な試みを試したり、教師や生徒が抱える問題の解決策を求めたり、単純に教師の生活のある側面を深く理解したりしたいという教師の願いから生まれる。...教師が教えているその教室における学習者集団に焦点があてられている。...理論的に意義ある問題についての一般的な理解に貢献するかどうかという点で評価されるのではなく、教師の指導実践に貢献するかどうか、それが促す自己内省を通して教師教育に貢献するかどうかという点で評価されるものである。(訳と下線は発表者による)

(1) Action Research

...自分自身が活動する文脈の中で、実践家によって実施される内省的な調査をさす。また、専門的な活動、私たちの場合、言語教授の実践における改善を目的として行われる。個々の教師によって、あるいは、教師のチームを含む協同的な形で実施される。...教師のためのアクション・リサーチの実施モデルは、以下の点を強調する: (1) 文脈に即したものであり、(2) 実践的であり、(3) 組織的であり、(4) 内省的であり、そして(5) 循環的である。(Ellis, 2012; 訳と下線は発表者による)

(2) Exploratory Practice (探求的实践)

Allwright (2003)による探求的实践の原理:

1. 教室の「生活の質」を重視せよ
2. 言語教室の生活を理解することを優先して研究せよ
3. あらゆる人々を関与させよ
4. 同僚性を高めるよう研究せよ
5. また、相互の力量形成につながるよう研究せよ
6. 理解のためのあらゆる研究を教室実践に結びつけよ
7. 研究を継続的な取り組みにせよ

(訳は吉田ほか, 2009 をもとした)

1.3 アクション・リサーチのプロセス

プロセス	特徴
(1) 課題発見 (Problem Identification)	指導中の問題や気になることが何かを明確にする
(2) 事前調査 (Preliminary Investigation)	現状としてどのような問題が起きているか調べる
(3) 仮説設定 (Hypothesis Formulation)	問題の原因を捉え改善策を考え仮説を立てる
(4) 行動実施 (Plan Intervention)	考え出した改善策を実際の授業で実施する
(5) 情報収集 (Data Collection)	改善策の効果の有無を示す情報を集める
(6) 結果考察 (Result Consideration)	改善策を実施した結果について深く検討する
(7) 課題発見 (Problem Identification)	さらなる課題を見つけ新たなリサーチを開始する

(Bailey, Curtis, and Nunan, 2001; 佐野, 2005 をもとに発表者が作成)

1.4 検証型アクション・リサーチと探求型アクション・リサーチ(横溝,2009)

(1) 検証型アクション・リサーチ	仮説の設定、そして、それを実践と通じて検証していくというプロセスで進めるタイプ
(2) 探求型アクション・リサーチ	仮説の設定は行わず、あるテーマをめぐって実施者の気づきが様々な観点から生じ、最終的には、そのテーマと教師である自分自身に対する理解が深まるというプロセスで進めるタイプ

1.5 本発表の対象とする「実践報告」論文の定義

「教育現場における実践についての理解を深めたり、実践の課題に対する改善策を探ったりすることを目的とし、執筆者自身(あるいは共同研究者)が行った長期的(あるいは短期的)な指導実践に基づき、実践内容および分析・考察を公開し共有するために発表および執筆されたもの」

2. 分析方法について

2.1 対象とする実践報告論文

中部地区英語教育学会紀要 40 号(2010)と41 号(2011)の実践報告の 15 本

2.2 実践報告(アクション・リサーチ)論文のカテゴリー

(1) 検証型アクション・リサーチ	質的	あるパターンが、ある事象に見られるかどうかを、具体的事象を描写しながら確認する
	量的	ある指導の効果が、学習者に見られるかどうかを客観的に検証する
(2) 探求型アクション・リサーチ	質的	具体的事象を描写しながら、あるパターンを探し出す
	量的	具体的事象を量的に分類しながら、あるパターンを探し出す

2.3 実践報告論文に関する基本データ

No.	研究の対象	研究タイプ	データ	実践者	期間
1	ある指導の効果と学習者の認識	混合-検証-探求型(量)	テスト、アンケート(評定法)	執筆者	6ヶ月
2	ある指導に対する学習者の認識	探求型-質	アンケート(自由記述)	執筆者	?
3	授業の学習者の情意への影響	探求型-量	アンケート(評定法)	執筆者	4ヵ月
4	活動の効果と学習者の認識	探求型-量	作文の総語数、アンケート(評定法)	執筆者	4ヶ月
5	授業に対する学習者の動機付け	探求型-質	授業の振り返り、アンケート(自由記述)、授業観察、インタビュー	執筆者	?
6	活動タイプの学習者への影響	探求型-量	アンケート(評定法)	執筆者	1コマ
7	ある指導の実践報告	?	アンケート(自由記述)	執筆者	10ヶ月
8	ある活動の効果	探求型-量・質	アンケート(評定法・自由記述)	執筆者	4ヶ月
9	大学生の指導法	探求型-量	テスト	執筆者	4ヶ月
10	ある指導の効果	検証型	文法テスト(反応時間・正答率)	執筆者	?
11	ある活動の作成	?	?	執筆者	?
12	ある活動の実践報告	?	アンケート(自由記述)	執筆者	?
13	ある指導の効果	探求型-量	アンケート(評定法)、生徒の日記	執筆者	3.5ヵ月
14	指導の効果の違い	探求型-量	テスト	執筆者	1ヵ月
15	留学生とのインタラクション	探求型-量	アンケート(評定法)	執筆者	5年間

3. 実践報告論文の傾向について分析結果

3.1 研究対象について（カテゴリーは Ellis, 2012 にもとづく）

(1) 指導法の効果	2 本	(6) インタラクシオン	2 本
(2) 授業内の談話構造	0 本	(7) 文法指導	2 本
(3) 教師の要因	1 本	(8) 個人差	1 本
(4) 学習者の要因	1 本	(9) その他	1 本
(5) 活動の効果	5 本		

3.2 研究のタイプについて

(1) 探索型-量	7 本	<その他>	
(2) 探索型-質	2 本	(5) 混合型(検証・探索)	1 本
(3) 検証型-量	1 本	(6) 混合型(探索-量・質)	1 本
(4) 検証型-質	0 本	(7) 実践の報告のみ	3 本

3.3 実践報告論文における目的-データ-結論の整合性について

タイプ	目的	データ	結論	特徴	論文数
A	探索	量	探索	アンケート(評定法)やテストに基づくパイロット的な探索型(量的)研究	2
B	探索	量	検証	・概念の構成的・操作的定義が不十分である ・探索を目的としているにもかかわらず量的データで検証をしている	5
C	探索	質	探索	インタビューや観察などに基づく記述的な探索型(質的)研究	2
D	探索	質	検証	・探索を目的としているにもかかわらず結論が飛躍し過ぎている	0
E	検証	量	探索	・検証のためのデータが不十分である ・課題の絞り込みや操作的定義が十分でなく、探索に終わっている	1
F	検証	量	検証	テストに基づく、仮説検証型の実証研究	0
G	検証	質	探索	・検証のためのデータが不十分である ・課題の絞り込みや操作的定義が十分でなく、探索に終わっている	0
H	検証	質	検証	メタ言語的記述テストか構造化観察の検証型(質的)研究	0
その他I	混合(検証・探索型)			検証および探索を行い、量的かつ質的に分析を行う検証・探索混合研究	1
その他J	混合(探索の量と質)			アンケート(評定法と自由記述)で調査を行う探索型(量・質混合)研究	1
その他K	実践報告のみ			実践の報告のみを行い、分析や考察が見られない実践報告	3

3.4 研究論文としての実践報告論文の課題について

(1) 実践報告(アクション・リサーチ)の具体的な課題

研究の段階	具体的な課題（分析を通した発表者の意見）
(1) 研究課題の設定	1) 検証型なのか探索型なのか、研究の目的が不明確な論文がある 2) 研究テーマの絞り込みが不十分のため、対象となる構成概念があいまい 3) 対象としている指導方法の妥当性があいまい 4) 研究対象に関する理論的背景(指導の優位性など)や先行研究の記述がない 5) 研究課題(および仮説)に対してもっとも適切なデータであるか疑問である
(2) データ収集・分析	6) 指導および事象(あるいは学習者)に関する具体的な必要最低限の記述がない 7) 検証および探索のためのデータの種類の少なさ、効果や事象の厚い記述ができていない 8) アンケート(評定法および自由記述)を行う際、被験者は否定的意見を述べない傾向にある 9) 検証型研究において関連要因が多く、解釈が困難になる傾向がある(統制群がない) 10) 探索型研究において具体的根拠を示さずに主観的な考えや傾向が記述されている

(2) その他の課題について

- a) 混合型(検証型+探索型)研究タイプについて
- b) 実践の報告のみという論文について

4. まとめ

4.1 公的な研究としての実践報告(アクションリサーチ)の価値(Borg, 2009; Freeman, 1996; Ellis, 2012)

- a) 他者からのフィードバック
- b) 他者への貢献(実践へ、理論構築へ)

4.2 学術研究としての厳密さ vs. 実践研究としての実現可能性(feasibility)

4.3 公的研究としての実践報告(アクション・リサーチ)の評価ポイント

	公的研究として評価観点	留意すべきポイント
探索型	(1) 実践に対する理解が深まったか? (2) 意味ある傾向やパターンが見つかったか?	具体的事象を質的・量的に豊かに記述しながら、その事象内にある意味ある傾向を探し出しているか?
検証型	(1) 実践の改善の手掛りが得られたか? (2) 実践の新たな課題が見つかったか?	ある指導の効果が、学習者に対し見られるか客観的に検証し、結果の理由を追究し、新たな課題を見出しているか?

4.4 公的研究としての実践報告(アクション・リサーチ)の発表の際の留意点

研究の段階	留意点	具体的な留意ポイント
(1) 研究課題の設定	1) 研究目的の明確化 2) 研究テーマの絞り込み 3) 指導方法の妥当性 4) 理論的背景や先行研究 5) データの適切性	1) 検証型なのか探索型なのか、研究の目的を明確にする 2) 研究テーマの絞り込みを十分にし、対象となる構成概念をはっきりさせる 3) 対象としている指導方法の妥当性を明確に示す 4) 研究対象に関する理論的背景(指導の優位性など)や先行研究の記述を十分に行う 5) 研究課題(および仮説)に対してもっとも適切なデータである妥当な理由を示す
(2) データ収集・分析	6) 必要な情報の記述 7) データの種類と量 8) アンケートの取り方 9) 検証における要因統制 10) 飛躍のない解釈	6) 指導および事象(あるいは学習者)に関する具体的な必要最低限の記述を行う 7) 検証および探索のためのデータの種類を多くし、効果や事象の厚い記述を行う 8) アンケート(評定法および自由記述)を行う際、被験者が否定的意見も出せるよう工夫する 9) 検証型研究において関連要因を絞り、解釈が容易になるように工夫する 10) 探索型研究において具体的根拠を示した上で筆者の考えや主張を記述する

参考文献

- Allwright, D. 2003. "Exploratory practice: Rethinking practitioner research in language teaching." *Language Teaching Research*, 7: 113-141.
- Bailey, K. M., Curtis, A. and Nunan, D. 2001. *Pursuing Professional Development*. Boston, MA: Heinle & Heinle.
- Borg, S. 2009. "English language teachers' conceptions of research." *Applied Linguistics*, 30: 358-88.
- Freeman, D. 1996. "Rethinking the relationship between research and what teachers know." In *Voices From the Language Classroom: Qualitative Research*, edited by K. Bailey and D. Nunan, 88-115. New York: Cambridge University Press.
- Ellis, R. 2012. *Language Teaching Research & Language Pedagogy*. West Sussex, UK: Wiley-Blackwell.
- 三浦省吾(監) 2004. 『英語教師のための教育データ分析入門』東京:大修館書店
- 佐野正之(編著) 2000. 『アクション・リサーチのすすめ』東京:大修館書店
- 佐野正之(編著) 2005. 『はじめてのアクション・リサーチ』東京:大修館書店
- 竹内理・水本篤(編著) 2012. 『外国語教育研究ハンドブック』東京:松柏社
- 横溝紳一郎 2009. 「教師が共に成長する時—協同的課題探索型アクション・リサーチのすすめ—」『リフレクティブな英語教育を目指して』pp.75-118. 東京:ひつじ書房
- 吉田達弘・横溝紳一郎・今井裕之・玉井健・柳瀬陽介(編著) 2009. 『リフレクティブな英語教育を目指して』東京:ひつじ書房